



女作家養成所

木下怪子

冲縄舎

きの した みち こ  
木 下 徑 子

1935年9月 東京に生る

都立小山台高校卒

早稲田大学第二文学部仏文科中退

1955年より8年間 東京放送に勤務

1983年 作品集「白い蝶」成瀬書房

1986年 「紅焰」上に同じ

現在 「四人」同人

本名 齊藤博子

現住所 武蔵野市吉祥寺東町2-25-17

## 女作家養成所

一九八九年一月二十八日発行

著 者 木下徑子

発行人 沖山隆久

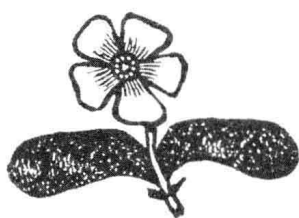
発行所 株式会社沖積舎

東京都千代田区神田神保町一―五二郵便番

電話二九一―五八九一 振替東京三一七七六

シナノ印刷 小高製本

ISBN4-8060-2050-8 C0093



女作家養成所

木下怪子





女作家養成所

装釘＊戸田氏

目次

一章

7

二章

93

三章

133

四章

183



# 一章



五十一年一月二十二日

はじめてAカルチャーの小説作法の講座を受講した。教室には五十人ほどの受講生がいた。午後  
の時間帯のせいか女性が多かった。男性は三人だけで、白髪の初老の男が二人、三十代の男が一人、  
女性たちの間に坐っていた。女は若くて三十代、殆どが四十代から六十代にかけての主婦である。  
教室に提出する作品は十枚前後と講師に言われている。樹下拡子は、これまで小説らしいものを  
書いたことがなく、随想のようなものを数篇書いただけである。

### 三月末

講座に出ると、タイプ印刷された綴りに「チーズ・ケーキ」という拡子の作品が載っていた。二  
月の雪の降った日に出来た十枚の作品である。築出と於野の作品と一緒に綴じてあった。

彼女はどきどきしながらざっと目を通した。自分の作品は、他の二人のものより文章がたどたど  
しく感じられた。

於野の作品の合評が終って、自分の番が廻ってきた。拡子は他の人と同じように、声を出して読  
んだ。

講師小股の作品批評、並びに教室の人たちの感想は、思いがけずよかった。樹下の作品「チー  
ズ・ケーキ」は、Z文芸誌の同人雑誌評の五篇の佳作に入るでしょう、場所があれば掲載されるか  
もしれない。十篇このような作品を書いたら、何処かに出して上げる、と小股は教室で受講生たち

の前で、はっきりと言われた。

講座が始ってはいじめて書いて出した作品が思いがけず評判がよかったので、拡子はこれから書いていくのに、自信のようなものが生じ励まされた気になった。しかし次の作品がどのように書けるだろうか、かえって不安になっている。

四月十五日

二作目を提出した。講座が終ったあと拡子は講師の小股に、時間がありましたら喫茶店の席にも出ていただきたいのですが、と頼んだ。

講座後残って待っていた十五、六名の受講生が、同じビル内にある喫茶店の一隅に、小股を取囲むようにして、長いテーブルの席に着いた。

二杯目のコーヒーを追加注文する人がいて、小股はお代りにジュースを頼んだ。

ふっくらとしたブランドグラスに入った、ほんのりと淡いピンク色のジュースが、小股の前のテーブルにひとつ運ばれてきた。

「綺麗ね」

拡子はミルクと苺が程よく混ったその色合に感嘆して、思わず呟いた。拡子の隣にいた於野が、ほんとうに、と合槌を打って頷いている。

「あんたに、あげる」

小股はいきなり、ピンク色のブランデーグラスを、拡子の方に向けてテーブルの上からそっと滑らせた。

たじろいだ拡子に構わず、小股は、自分の隣に坐っていた野地の方に顔を向けて、あの人は才能があるから、と言った。

すぐに拡子の方に向き直って、

「あんたは東京生まれですか」と勢よくきいた。

「母は佐渡の生まれで、父は東京です」

「佐渡……」と考えるふうに首を傾げた。

「どうしてですか」

「文章にスピードがある。ひとつのものをテーマに出すのは、よいのですよ」

拡子は小股の言われた意味がすぐに飲み込めず、彼に顔を向けていた。

近くに坐っていた築出が、着物姿のしなやかな体をテーブルに乗出すようにして、「ほら、『チーズ・ケーキ』よ」と拡子をはじめて書いた小説の名を口にした。

しかし拡子は、そうではないと思った。その日教室に提出した彼女の二作目を、小股はすでに目を通したに違いない。

白い陶器のコーヒーカップの間に、淡いピンク色のブランデーグラスが、可愛らしく、拡子の目

の前にひとつぼつんと置いてあった。細長いテーブルを取囲んで、受講生の目がいつせいにそのグラスに注がれている。

拡子は小股に再び励まされたのを知って、今後書き続けていく活力のようなものが体内に湧き上ってくるのを感じ、胸がいっぱいになった。

帰途、家の近くの本屋で、小股の作品集「鳥」を取寄せてもらう。休日が続いて、次の講座まで三週間ある。これまで一度も小股の作品を読んだことがなかった。樹下拡子は、講師については何も知らないで、講座に出席していた。

今年の始め、一月八日付けの新聞で、小説作法の講座の紹介記事を読み、彼女は早速受講を申込んだのである。

五月六日

M会館を借りた。小説作法の講座は隔週一回の木曜日の午後だが、受講生がそれだけでは物足りないと思いはじめている。話合いの結果、講座が休みの週は、他の会場を借りて集ることになった。会場係りは拡子が受持つことになった。築出の紹介で、講座のある都心のビルと講師の家のおよそ中間地点で、会場が借りられることになった。拡子の家はその会場から近いので、事務上の手続きをするのに便利である。

古山には会計を受持ってもらった。同じやり方が、その年の終りまで続くことになる。

次年度より受講生の希望で、週一回、金曜日の午後になる。築出が受講生の意見をまとめて小股に手紙を書き、要望したのである。

初めてのM会館での集いには、小股はみなさんと相談することもあろうからと言われ、出席されなかった。

拡子の二作目はすでに印刷されて、受講生の手もとに配られていた。

彼女が定刻より早めに会場に着くと、入口を入ったすぐ近くの喫茶所に、すでに白居と築出が来ていた。二人は小さなテーブルに向い合って、静やかにコーヒーを飲んでた。白居は小股より数年年上の初老の男性で、数少い三人の男のうちのひとりである。

始るまでまだ時間があるので、拡子は先きの二人に声をかけて同席させてもらい、コーヒーを注文した。

築出は拡子と同じ世代で、お能の先生をしている。一流大学の文学部出身の才媛であり、しかも色白の美人で独身である。

先に来ていた白居と築出の話は間もなく途絶えて、拡子がコーヒーを飲み終らないうちに、彼らは席を立てていった。なぜか二人のようすが、先週までと異って妙によそよそしかった。築出が、初老の白居に深刻な人生相談などしていて、拡子が割込んで彼らの話の邪魔をしてしまったのだからか。

拓子はひとりでゆっくりとコーヒーを飲み終えて、新しく借りた会場の日本間に入った。細長いテーブルを囲んで、二十名程が坐れるこじんまりとした部屋だった。

しかし、出席者のようすが、ふだんの講座の時とかなり違っていた。戸橋だけがいつもと変わらず、にこやかに坐っていた。彼は受講生の中では若い三十代の男性である。

「誰れか、エロ小説を書かない。あんた、書きなよ。書けるでしょ」

拓子よりかなり年上の滋兼は、座敷の中程の彼女の向い側に、皺隠しの薄い色眼鏡をかけて坐っていた。

「まだ若いから、書きたくないわ」

いきなり意地悪く口を切り出した滋兼に、拓子は真面目に応えた。

「十七年間もただで上げたくせに」

滋兼は冷やかすように口の端に力を込め、拓子に向って絡んできた。

十七年間という言葉は、拓子が講座に提出した二作目の作品の中に出てくる。その作品は、結婚して十七年目になるという女を主人公にしてあった。偶然に滋兼の口から出た言葉とは、思えなかった。

小股が、これまでお色気小説、中国の妖艶物語を書いていたことを、拓子はこの時まだ知らなかった。家の近所の本屋から取寄せてもらった小股著の「島」は、真面目で地味な小説集だった。

「男の人にもてるでしょ」

珍しく赤いブラウスを着てきた中年の女性宮下が拡子に向ってそう言い、膝をゆるめて坐っていた出席者の後ろを、ひらひらと舞うようにはしゃいでひと廻りした。

「あなたの小説は、読みたくない。知っている人のだから無理して最後まで読んだけれど」

少し遅れて部屋に入ってきた於野は、女学生のようなおかつ髪で地味な紺地のスカートを穿いて、拡子から顔を背けるようにして早口でそういった。

「あなたのは少女小説、ミセス、アンアンに載る小説よ」

先程喫茶所で白居とコーヒーを飲んでいた築出が、色白でおとなしそうな拡子の顔を露骨にじろじろ眺めやりながら、他の人の同意を得たとばかり気持よさそうに小鼻をうごめかして述べ立てた。彼女たちの容赦のしない思う存分の言いように、拡子はすっかりおどろき、返えず言葉もなく黙っていた。

講師が出席していない女が多い集りは、解放感からか教室に居る時とはうって違って、講師がいたらとても口にはしないだろう、えげつない品のない言葉が飛び交っていく。それらの言葉は、拡子がかつて自分の周辺では耳にしたことのないものばかりだった。たった今彼女たちの口から出た言葉は、拡子にはとても信じられなかった。すでに凄まじく喧しい中年の女たちの真ただ中に、自分が居るのに気づくのだった。